

東雲八夫

社界適合者たち

社界で、生きる。

それは、戦いだ。



少年は、消しゴムで、白い軌道を描く。少年の後ろには、何もない。だから、様々なものが、なだれ込んでくる。少年は、振り返らない。

道の使い道を知ってるかい。僕は、向こうへ行きたいんだ。誰かが、道を塞いだ。少年は、それを知らない。

知らせ。知らせ。また、知らせ。鳥。一羽、舞い降りた。続けて、二羽、三羽。

教えてくれて、ありがとう。少年は、深々と頭を下げた。紙。仕方がないので、背負った荷に、放り込んだ。また、重くなる。そして、膨れる。

閑静な住宅街を抜けて、商店街へと少年は進む。少年が通った後は、やはり、白い道ができている。白く染まっているのだ。

この紙を作った人たちにとって、紙の中の世界は、過去なんだ。でも、読んでる人にとっては、今。

未来の未来の、未来にいる人。その人のいる場所へ、少年は向かっている。本当の未来を取り戻す。

背負った荷は、大人一人では持ち上げられないほどにまで、膨れ上がっていた。だが、少年は平然と歩いている。鳥が多くなってきた。荷にくちばしを突っ込んで、知らせをおいていく。

額には、うっすらと汗がにじんでいた。灰色の塔。見上げながら、少年は汗を拭った。てっぺんは見えない。

入口に荷を置いた。鳥が集る。みるみるうちに、膨れていく。

役目を終えた。少年の表情は、晴れやかだ。

最近、好きな人ができたんだ。歯を出して、笑った。

荷が、弾けた。乾いた音。白撃が少年を飲み込んだ。渦を巻いて塔を包み込む。

何も、見えない。少年は、振り返った。道。それも、見えない。さよなら。思い出したかのように、手をふった。

塔は、渦の中。不意に、その渦が消えた。拡がる。塔も、消えた。紙切れが、舞った。一枚。少年の手元に、飛んできた。

灰色の塔が、ありました。そう、書かれていた。

少年は、からの荷を背負い、歩き出す。

昔、好きな人がいたんだ。名前は、忘れた。でも、また、好きになればいい。

紙をくわえた鳥たちが、空を舞う。

きっと、大人になっても、大好きだ。

いつも、今は、一つしかない。一つ選んだら、それ以外は選べない。全部、後悔か、どうでもいいものになる。大人になったらねって、大人になったら、生まれ変わったらねって、いつになったら、それを選べるんだ。

自分がされて嫌なことは、他人に対しても効果的ですか。

他人が成功したときは、誰かが失敗した時ですか。

自分が選ばなかった今を、まだ、とっておきたいですか。

それは、今ではなく、後悔なのに。

いつも、未来は、一つしかない。一つ選んだら、それ以外は選べない。全部、後悔か、どうでもいいものになる。

出来るわけないって、届くはずないって、幻なんだって、誰に言ってるんだ。

あんたが我慢したから、僕も我慢しないといけないんですか。

あんたにできなかったから、僕にもできないんですか。

歌は、聞かなきゃいけないんですか。

耳を塞いだら、失礼ですか。

僕も、歌っていいですか。

人の笑顔を奪っても、自分が笑えないのはなぜですか。

早い者勝ち。未来は、取り合い。愛も金も、本当は取り合い、奪い合いだ。こたえも、つまりは、といすらも。

奪わずに、手に入れるには、どうしたらいいですか。

戦わずに、守るには、どうしたらいいですか。

傷つけずに勝つには、どうしたらいいですか。

みんなを笑顔にするには、どうしたらいいですか。

どうやって、どうしたら、どうやって、どうしたら。

そうやって、今を使って、言葉を探してる。泣いている。耳を塞いで、歌ってる。

いつも、答えは、一つしかない。一つ選んだら、それ以外は選べない。全部、後悔かどうでもいいこと、そして、誰かの答えになる。まだ、答えてはいない。それを、自分の答えだと言うことが、初めてそれを、答えにする。

男は、塔のてっぺんで、叫んでいた。泣いている。

初めて、この街に来た。空に近い。そう思い、この塔を登った。大分、疲れた。

鳥。不意に、舞い上がった。いや、紙。多すぎる。下の方から、地鳴りが聞こえた。白撃。まるで、生き物のように、塔を飲み込んだ。

紙。何か、書かれている。走れ。

どこへ。

渦の隙間から、少しだけ空が見えた。遠いな。そう、思った。

泣いている人間は、かわいそうですか。涙は、弱さの証ですか。

そして、弾けた。紙切れ。舞い、落ちる。一枚だけ、塔を見上げていた少年の手に、吸い込まれた。

灰色の塔が、ありました。全部、なくなった。少年は、歩き出す。

しばらくして、誰かが看板を立てに来た。少年は、知らない。そこには、緑の塔が立つらしい。知らせは、まだない。

春

季節の訪れは、聞いてもいないのに、知らされる。でも、わざわざ、季節の終わりを告げるものは、いない。

いつも、次の季節が、僕らを待っている。終わって、始まるまでの間には、何がある。CMでも入れておいてくれるといいのに。それで、少しは、準備ができる。

僕らに、春は、早すぎる。だから、怯えている。でも、かわりに来たのは、砂嵐。

目を、開けられない。息が、できない。前も、後ろも分からない。聞こえるのは、轟音と、自分の弱音。

地に、手をついた。砂だ。

焦って、踏み込むと、真紅。何も、しなければ、朽ちる。

気づけば、周りは夏だという。

全てに取り残された僕らは、這う。

闇。砂の感触。聞こえるのは、咆哮。

終わって、たまるか。このまま、死ねるか。

砂を、噛んだ。

手に、何かぶつかった。リモコンのようなもの。周りの季節なんて、どうでもいい。君は、スイッチを切る。

それが、諦めないという、証し。こんな、風。そう言って、立ち上がる。歩き出した。見えなくても、恐れは、ない。

進め。それが、戦い。気づけば、駆けていた。

君は、気づく。音でなく、声なのだ。風も、止んできた。

少し、目を開ける。遠くに空が、見えた頃。君は、それを春と呼ぶ。

いつも、何かにすぎるような生き方をしてきた。

幼かったが、生まれた理由は、すぐに何処かへ消えてしまった。祖父母が、自分を育ててくれた。共に、畑を耕し、野菜を売った。気づくと、一人になっていた。そして、もう、先は長くない。

数年前、老人は、丘に移り住んだ。売るものより、自分で食べるものだけを作っていればいいのか。

必要なものは、時々、街へ行って、野菜と交換して手に入れた。十分、生活できる。

街を、見下ろす毎日。後ろには、山が、いくつも連なっている。

ここに移り住んでから、すぐにあの少年が現れた。空の荷を背負い、羊を一頭、連れていた。名前は、聞いていないような気がする。どこから聞いたのかは、わからないが、自分に会いに来たと言った。そして、連れてきた羊を、そこらへんに放ち、駆け足で去っていった。笑っていた。羊は、勝手にくつろぎ始め、当然という感じで、丘に住み始めた。その日から、鳥が知らせを運んでくるようになった。紙をくわえ、街から飛んでくる。鳥が来ると、どこかで見ていたように、羊が寄ってきて、紙を食べた。ひとりでは、なくなった。

数日過ぎた。羊が、増えた。二頭。畑の石を捨てるために掘った穴の周りで、仲良く寝ていた。あの少年かと、思った。

今では、羊は30頭にまで、増えている。その分、飛んでくる鳥が増えた。おかげで様々なことが、わかるようになった。

畑を耕し、羊に囲まれて生きている。毎日、読みきれないほどの知らせが届く。時には、そのまま、羊の口に入ってしまうことすら、ある。

昼。暑いと思うほどに、太陽が照っていた。汗ぬぐい、空を見る。鳥。珍しく、自分のところへ飛んできた。

緑の塔が、できました。

遠すぎて、見えはしない。街の反対側だ。

鳥。くちばしには、一枚の紙。窓辺にいた男は手を伸ばし、それを受け取った。街の東部にあった、灰色の塔が、なくなった。

二階建ての、立派な屋敷。周りは、頑丈な塀に覆われている。反対側の部屋に移動して、外を見た。本当だ。ない。

屈強な大男たちが、塀の外で、屋敷を囲んでいた。工場で働いている者たちだ。

庭は、広い。何か叫んでいるようだが、ほとんど聞こえない。

男は、やわらかい長椅子に腰を下ろした。おもむろに、知らせの紙を丸めて、くずかごへ投げ入れた。

先月、税金を少し上げた。それが、その男の仕事だった。恨まれるのは、慣れている。払えないほどの額ではない。男は、そう、思った。

あの者たちは、頻繁に、酒場で酒を飲む。そして、つまみも食べる。それをやめればいい。酒屋で買って、家で飲めばいいのだ。それだけで、支払うべき金額は手に入る。それか、酒を断ればいい。

しかし、あの者たちは、お前のせいで民が苦しんでいると言う。彼らは、毎日、機械を回し、荷を運ぶ。毎日、同じことを繰り返している。あれだけやれば、誰だって疲れるだろう。不思議に思う。なぜ、毎日同じことを繰り返す。未来に、時間を投資しようとは、思わないのだろうか。酒を飲み、酔っている時間や、雇い主の悪口を言いながら騒ぐ時間を、もったいないとは思わないのだろうか。

税金を払えないのが、私のせいならば、金と時間の浪費をやめられないのも、また、誰かのせいかな。

それなら。男は、いたずらに、考えはじめた。論理の、鎖を追う。

もう少し。たぐる。

死ぬのも、誰かのせいかな。何か、違う。もう一度、初めに戻り、今度は反対側へ進みだした。ここか。

生まれたのも、誰かのせい。彼らなら、言い出しても、おかしくはない。それなら、生きているのも、誰かのせいかな。さすがに、聞いたことがないな。だが、今の彼らに、ぴったりの言葉ではないか。そう思っているから、あんなにも自分の人生を粗末に扱えるのだ。

ワインの空き瓶が、飛んできた。割れた。屋敷の手前に破片が飛び散った。届きは、しない。

男は、それを見ながら、小さくため息をついた。

少女。どこから、入ってきたのだろう。かがみ込んで、破片を拾い始めた。素手。いけない。そう思い、男は立ち上がった。

「触るな。怪我をしてしまう」

思わず、大きな声を出した。少女の体は、一瞬、硬直した。手には、破片が、数枚。振り返った。金色の長い髪が、少女の顔に巻きついてから、大きく弧を描いた。ゆれた。大きな瞳で、覗き込むように、見てくる。

「後は、私がやります。置きなさい」

優しい口調になっていた。少女は、破片を地に置いた。何か言いたいことがあるような感じで、口だけをわずかに動かした。声は出ていない。

「何か、言いたいことがあるのですね」

少女は、大きく頷いた。長い髪が、ゆれる。部屋に、招いた。

「手は、大丈夫ですか」

「あの、今月の、税を払えないので、少し待ってもらえないでしょうか。来月には、必ず」
唐突に、話し始めた。子供にしては声が低く、妙な落ち着きがある。

「来月ですか」

無論、税の取立てを行うのは、自分の仕事ではない。一ヶ月や、二ヶ月の滞納なら、よくある話だ。それも見越しての、増税だ。本当は、来年のための、貯蓄。

「必ず」

「あなたがここへ来たことを、ご両親は知っておられますか」

少女は、首を振った。

「では、安心してください。来月でも、再来月でも、問題ありません」

「そうですか。来月からは、もっとたくさんのワインが作れるようになります」

割れたビンを見ながら、少女は、言った。安心したようだ。表情が、和らいだ。

ああ、あの工場の。男は思い出した。子供が、一人いたはずだ。

味は良いが、あまり出回らないワイン。小さな工場なのに、今時、珍しい。そう思っていた。
一ヶ月後、店であのワインを見かけて、買った。家に帰って飲んでみると、なるほど、うまい

。酔いが、回ってきた。そういえば、あの少年も、ふらっと庭に現れて、気が付くといなくなっていたな。名前は、聞いていないな。灰色の塔は、どっちにあるかと、聞かれた。

昼間は、普段、家にいない。

それでも、時々、滞納者たちが塀の外で騒ぎ立てている様子を見ることがある。その度、考える。論理の鎖はだいぶ長くなっていた。

他人のせいで生きている彼らは、今日も、自分のために死なない。

駆けていた。光は、待つはくれない。当たり前のように、そこにある。追いかけてくる。皆、駆けている。当たり前のように、駆けている。息は乱れない。汗も、かかない。どこも、痛まない。だから、駆けている。

そんな、理屈があるか。そう思いながらも、男の体は動き続けている。どこへ向かっているのかも分からない。目的も、分からない。

前に、影ができる。後ろから照らされているのだから、それは、当然だ。

巨大な光だった。近づくと、熱いらしい。遠くにあるので、本当かどうかは分からない。だが、光は、温かい。これだけ離れているのにだ。近づいたら、焼き尽くされてしまうのだろう。

何も、残りはしない。

一人が、軽くつまずいた。男の、正面。男は、両足で、地を蹴った。つまずいた者の上空。そして、地。振り向いた。わずかに、顔が見えた。あきらめた。そんな顔だ。

「止まるな」

声すら、光にかき消された。白んだ。もう、前を向いていた。

何度、こんな光景を見てきただろう。あの顔を、もう見たくない。止まれ。願っても、世界は、回る。目の前の、影。何の表情もない。自分が駆けているということだけは、よくわかる。

遠く。左の方で、また誰か止まった。横に走る余裕はない。光に吸い込まれる。

なぜ、自分だけ、駆けていられるのだろう。皆、いなくなっていた。なぜ、止まらないのだろう。気が付くと、影に向かって、話しかけていた。もう、誰もいない。だから、あの顔を見ることは、ない。それならば、いつまでも、走っていられる。

止まる理由がなくなった。

駆けていた。光は、待つはくれない。当たり前のように、そこにある。追いかけてくる。皆、駆けている。当たり前のように、駆けている。息は乱れない。汗も、かかない。どこも、痛まない。だから、駆けている。

初動

心臓が、動き出す。初動もなく、血液を送り出す。そして、吸い込む。

まだ、倒れるな。まだ、駆けろ。光に、吸い込まれてしまう。だから、駆けろ。

不意に、呼吸が苦しくなった。今まで味わったことのない苦痛だ。誰かに、足を取られた。影。そんなわけがない。そう思った。だが、膝を着いていた。誰かが、自分を飛び越えていった。光。終わりだ。

前から、声が聞こえた。

だが、男は、振り返った。後光。美しい。全て、白んだ。

気が付いた。死んでいない。いや、死んだのか。目を開ける。空。空とは何だ。空は、空だ。仰向けに、寝ていた。ゆっくりと、体を起こす。横にも、空。風。どこだ、ここは。立ち上がり、歩き出す。下があった。街。

どこか、高い場所にいるのだ。

「おはよう」

振り向いた。子供。じっと、見つめてくる。白い肌と、金色の長い髪。女か。

「どこだ。ここは」

「緑の塔だよ」

言いながら、少女は歩み寄ってくる。

「あれ、見える？」

指差す方を、見た。砂嵐だ。

「あれが止んだら、向こうにある国と戦うんだ」

国があるのか。見えない。いや、待て。俺は、誰だ。駆けていたはずだ。どこを。光に、吸い込まれた。それから、ここに来た。

なんだ、これは。次から、次へと、疑問が湧いてくる。

「戦うために、生まれたんでしょ」

少女は、手首辺りを見ながら、言った。男は、自分の左手首を見た。銀色の、腕輪。俺の、心臓だ。

「もう、皆、行っちゃったよ」

ああ、急がなくてはいけない。思った時には、駆けていた。男は、緑の灯から飛び出した。落ちる。風。

目の前には、白っぽい道があった。地に足が付いた。轟音。地が割れた。生き物のように、ひびが拡がる。

新天地へ、急がなくて。 思った時には、駆けていた。

少女は、塔のてっぺんから、見下ろしていた。顔を上げる。砂嵐。

まだ、止まない。少女は、そう、思った。扉を開け、中へ降りていった。塔の中では、父の知り合いが、働いている。

緑の塔が立ってから、まだ、日は浅い。

しはいしゃの刹那

「陀転生（だてんせい）」

名を呼ばれたのは、久しい。声で誰か、すぐにわかった。畑を耕していた陀転生は、振り向いた。

「何をしに来た」

かっぷくのいい、大男。金色の短髪だ。弥武（びう）である。右手には、ワインの瓶が二本あった。本当は、大きな瓶だが、弥武が持つと、小さく見える。

「仕事と酒を持ってきたんだが」

「酒だけ、置いていけ」

構わずに、くわを振り下ろす。鳥。乾いた土に、影が映った。弥武の肩に、止まった。

「最近、街では盗人が多いらしいぞ。陀転生」

「仕事は、何だ。聞くだけ、聞いてやる」

くわを動かしながら、言った。弥武は知らせの紙を丸めて、こっちを見ていた羊に向かって、ほうった。鼻先で転がして、羊が食べた。

「来年か、再来年。嵐が止んだ後の話だ。急ぎではない。戦いに、参加しろ」

「何を言っている。今更。もう現役でもなんでもない。わしは、畑を耕して、羊に囲まれて、ここで死ぬのだ」

「あの少年が、置いていったのだろう。あの、羊たちは」

「知っていたのか」

「適合者だ。知ってるさ」

「名は」

「絵歩（えふ）」

「羊を運ぶ仕事か。ちからは、何だ」

「なんでもやるさ。あいつは」

「なぜ、わしは名前を思い出せない」

「それは、歳さ」

弥武が低い声で笑った。きびすを返した。足元に、羊がいた。珍しく、ほかの人間がいたので、寄ってきたのだろう。弥武は頭を、撫でている。

「何年も、ここにいるのだろうから、社界のことは何も知らないのではないか」

「知らせは、読みきれないほどだ。それに、ここは眺めがいい」

「お前が、誰なのかを知っている人間は大勢いるぞ。適合者、陀転生」

「それは、忘れてしまいたいものだな」

「まあ、またくるさ。それまでに死なれても困るからな。忠告だ。腕は慣らしておいたほうがいいぞ」

無視して、陀転生は苗の近くに生えている雑草をむしり始めた。

しばらくして、腰が痛くなり、立ち上がった。小屋に戻ると、卓の上には、ワインが二本置い

であった。勝手に入りおって。そう思いながら、瓶を持ってみる。以前と、変わったところはない。最近、新しい作り方を考え、大量に作れるようになったらしい。

栓をぬき、瓶を傾げる。喉が渴いていた。思いのほか、飲んだ。腹の中から、ぶどうの香りが立ち上ってきて、鼻から抜ける。口の中には、ほのかな酸味と甘味が残る。溶け出して、香りになる。ぶどうの香りと交じり合う。うまい。また、飲んだ。肉が、欲しくなる。どこかの国では、羊を食べるらしいが、この国では毛をかるだけだ。毛刈りの人間が丘に、時々やってきて、金をおいていく。たまに、肉の塊を持ってきてくれる事がある。それを煙でいぶして、乾燥させる。それで大分もつ。さらに、陀転生は薬草を練って、表面に塗る。独特の苦みと殺菌の効果がある。

日が暮れていた。外に出て、火を起こした。こぶしぐらいの大きさの石を集めて、火の中に放る。肉をその上で焼く。酔いが、回ってきた。気づけば、二本目だ。

小屋から、もう一枚肉を持ってきた。なんとなく、銃も手にとった。背負う。

肉を焼きながら、銃を天に向けてみた。しばらく、使ってない。いや、何年も、使っていない。月。撃ち落とせそうだ。

酔っている。自嘲しながら、肉をひっくり返した。少し、こげた。街は、家々の灯で、光っている。光が、にじむ。いつもなら、点のように見えるはずだ。相当に、酔ったな。

そういえば、最近、街では盗人が多いと聞いたな。弾が、入っていることに陀転生は気づいた。

おもむろに立ち上がる。膝が、震えた。街を観た。ほぼ、丘のふもと。近いな。2kmもない。ワインの瓶を置いた。

気づいたとき、撃っていた。

次の日の知らせ。家に忍び込もうとしていた盗人が、突然撃たれて、死んだ。

酔っていたのだ。そう、思った。

陀転生の、ちから。視羽射(しはい)。